萬葉集略解

十二上

柳田文庫
文庫11
A 104
17

萬葉集巻第十二

古今相聞往来歌類之下

正述心緒歌一百十首

寄物陳思歌一百五十首

問答歌三十六首

羇旅發思歌五十三首

悲別歌三十一首

文庫11 A 104 17

柳田泉文庫

48 18655

目録ニ古今相聞往来歌類之下とあて、第十一の巻と同じ巻なるを、
その数多ければ上下とわけたるにて、上の巻に出たるその此、此巻に乗載たる
もれたまへる有りて上の巻にま間に入さるを此巻にハ旅に入、まし猶若に
のせたるもまたそらハ是概とされし此の集ども二様にあやしか、又ハ
傍への異なるちがへるよりて、そのまゝれとも集めてしそのわけるべし

正述心緒

我背子之朝明形吉不見今日間戀暮鴨

わがせこのあさけのすがたよくみずてけふのあひだをこひくらすかも

あさけハくらきあけかたの頃男の帰るをよく見ずと

よし朝より一日其女の恋へるる也

我心等望使念新夜一夜不落夢見

わがこゝろとのぞみおもへばあらたよのひとよもおちずいめにしみゆる

二の句のごとし昔人ぶりによむべけれど、穏ならねば、あらたよの訓も叶ぬを

ばかりし、二三の句誤れるなるべし、試にいはゞ暁使は無使の誤ならんか、もしくは

くもんばかり訓べし、新夜は新むの誤にて、枕詞なるべしと翁はいはれつれど、新夜

は集中に年月はあらたまとのみ有て、あらたよとよむ事なく、毎夜といふはあるべし、わがん

のうせんものら昔人ばかりはしかよみしゆゑにいへる也、或人は使の下美の字

脱たるにて、さらば等と二の句へつけてとましとよむべしといへり、猶考べし

與愛我念妹人皆如去見耶手不纏為

うるはしとわがおもふいもを人みなのゆくごとみめや手にまかずして

己が妹が道行くを見る、思ふ中なれば、大よその人の見ゆるを見るやうにてあら

んと歎くなり、もしくはうるはし、與愛とあるはいづれか彼と此とすべ

時に依てなりひさるなるべし、なほ後にすべからず

比日寢之不寢敷細布手枕纏寢欲

このごろのいのねらえぬは、しきたへのたまくらまきてねまくほりこそ

此ごろうまいせられぬは、妹が手枕まきてねまほしく思へばなりといふ也

忘哉語意遣雖過不過猶戀

わするやとものがたりしてこゝろやりすぐせどすぎずなほこひにけり

思ひをいひてまぎれやするとて、人とくさぐさの物語して思ひをやりて

さんとすれど、えやらぬことをすぐすは、わすれで恋しきなり、巻十一に二所

意追とかきて、なぐさむとよめりしも、遣は追の誤にて、なぐさもるともよむべし

夜不寢安不有白細布衣不脱及直相

よるもねずやすくもあらずしろたへのころもはぬがじたゞにあふまで

妹に逢までは、君の衣を脱ずあるべし、さては安くもあらねば、夜もねずてぞ

らんとなり

後相吾莫戀妹雖云戀間年經乍

のちもあはんとなこひそいまは又どころにあるあひだなとしたへふつ

ちかくてはまもなくみんのるを伐さのこころするまれと妹ハ又どもえ

直不相有諸夢谷何人事繁

ただにあはずあるはうべなりいめにだになにのひとのこととのしげからん

人言繁くして、ただちにあひみぬへこころちるを義ふするいうたる人の言

書きれバ見えぬめるやと疑之、有の下一本者の字あり

或本歌曰寝者諸毛不相夢左倍（ウツヽニハ・ウベモ・アハナリ・イメニサヘ）

寝ハ寤の誤なるべし

烏玉彼夢見繼哉袖乾日無吾戀矣

ぬばたまのそのいめにしもみえつげや、そではひるまなくわがこふらくを

男のつまハ、夜ごとに夢にみえよとてれ袖をかへしてあるをといふ、女の方

ちからは、寝まもを、彼ハ夜の誤なり、よるのゆめをとも紙へしといへり

現直不相夢谷相見與我戀國

うつゝにハただにもあはず、いめにだにあふとみえこそわがこふらくに

與ハ乞の誤也

寄物陳思

人所見表結人不見裏紐開戀日太

ひとみれバうへをむすびて、ひとみねバしたひもあけてこふるひぞおほき

下紐のおのづから解るハ人にあはんおつる解とするあり、されども解くあハ

むすぼるの之

人言繁時吾妹衣有裏服矣

ひとごとのしげきこのごろわぎもこがきぬにあらせバしたにきましを

妹が即衣ならバして

真珠眼遠兼念一重衣一人服寝

まてまつくるちをしかねておもへれば ひとへごころかもひとりさきてねぬ

まちまちて 梓泪、眠ハ附の字の誤く、寝くするきさハまれなるべきよにて、遠よ

を恵念故ニ一人ねむるといふふうくハひとりねのさまのことしとといへん

とく一書とれといつくえ、定本ニ遠の下近の字ありまもとちうねてとま

辟しといへる字ハまむつく彼此兼手とあれバ此説によるべし

白細布我紐緒不絶間戀結為及相日

しろたへのわがひものをのたえぬまにこひむすびせんあはんひるでに

下句の結る八人と結るさのなるべし、仍く、いまだ絶ずてぬさきに結だんと

いへく、さく恋結びとハ其恋のかたちの為に結ぶをいふ、古ニ集に恋の歌の

つねとまむせんとよめるそとん

新治今作路清聞鴨妹於事矣

にひはりのいまつくるみちのさやかにもきこえぬかもいもがうへのことを

新しき路ハ清らなるものなれバよハさやかにきこえんかの、妹がうへのこと

とハ妹が身のうへさまをといふ

山代石田杜心鈍手向為在妹相難

やましろのいはたのもりにこころおそくたむけしたれやいもにあひがたき

神名帳山城久世郡石田神社、また此巻十三にもよめり、たむけしたれやハ、

たむけしたれバまでのそこそくハなさのしめん

菅根之惻隱惻隱照日乾哉吾袖於妹不相為

すがのねのねもころごろにてるひにもひめやわがそでいもにあはずして

妹に逢ずして涙にぬれし袖ハ日のてりに照ても乾かぬよしなり

妹戀不寝朝吹風妹經者吾共經

いもをこひいねぬあしたにふくかぜハいもにしふれなバわれにさへふれね

せひといねずなりしあさの風ゆゑ妹がまへにふれなバ吾にもふれよとよめり

鈎ヲ鉤ニ誤

みやまおぎさあんとく、経ハ借字にて、鵜ハ共宮ホトとく

飛鳥河高河避紫越来信今夜不明行哉

あすかがハたかがハよぎてこえてきつまことにこよひハあけずもゆかぬや

高川ハ水のまさる時の川をいふ、水まさる河をよぎて、遠き道をして遠くきたる

きたる労をよろこびて、今よひハまどろまでもあらずてゆけらめと、

紫一本紫に作るハよろしハよどを延てよめり

八鉤河水底不絶行水續戀是比歳

やつりがはみなそこたえずゆくみづのつぎてぞこふるこのとしごろを

八つり河大和高市郡、上ハつぎてといはん序のみ

或本歌曰水尾母不絶

礒上生小松名惜人不知戀渡鴨

いそのうへにおふるこまつのなををしみ人にしられずこひわたるかも

此ハそハたゞ大なる巌のあたりに生ある松ハ、名を月ごとのむかしを、

名を惜みて隠せるか、又ハ女を松にたとへ小松ハ若松にて、若妹子のこと

なるべし

或本歌曰巌上尓立小松名惜人尓者不云戀渡鴨

山河水陰生山草不止妹所念鴨

やまがはのみづかげにおふるやますげのやまずもいものおもほゆるかも

陰一本隠に作る、みづかげハ河べ、巻十天の河ハ水陰草ともよめり、

色ハ水こもれる草をいへし、上ハやまずといはん序のみ　妹がおもほゆる

とハ妹がうへのおもひにて

浅葉野立神古菅根惻隠誰故吾不戀

あさはのにたちかむさぶるすがのねのねもころたれゆゑあがこはなくに

或本歌曰誰葉野尓立志奈比垂

あさぞめは和名抄武蔵入間郡麻羽安佐波と有るべし、巻十一おの俗本
の解くとあり、因本の誤字ゆゑ宍にあらしで、為のいとし、或本によりて
改む、神古の字は紳の字の誤なるべし、神は紳の字の誤、古は有の字の誤なるべし
紳は帯なり、むらひき帯をかりにてかりなく、紳有を
たちまちひき訓べし、古点らみちこもげと訓れど、義まさる
名きりし、束は古くは袁誰か乳まんと共にまるまでありなん
といいれき、されど紳をあるひと訓んすつぎ、猶考べし

右二十三首柿本朝臣人麻呂之歌集出

正述心緒

吾背子乎且今且今跡待居爾夜更深去者嘆鶴鴨

わがせこを いまかいまかと まちをるに よのふけぬれば なげきつるかも

玉釧巻宿妹母有者許増夜之長毛歡有倍吉

たまくしろ まきぬるいもも あらばこそ よるのながきも うれしかるべき

釧を釵と誤れるを、玉くしろ枕詞、まき宿るは妹と手枕ひくぬるなり、

よひとても一夜のこと

人妻爾言者誰事酢衣乃此紐解跡言者孰言

ひとづまに いふはたがこと さごろもの このひもとけと いふはたがこと

人づまは自らをさしていへり、いふは誰がことぞといふは、その紐とけといふ人と添く

ぶかるなり、されのさは狭なり、巻十の衍、酢は音をかりて佐の仮字とせり、

又作ヶ作の誤なるべし

如是許将戀物其跡知者其夜者由多爾有益物乎

かくばかり こひむものぞと しらませば そのよはゆたに あらましものを

ゆたはゆたかにゆるやかなり、しらましかば、その夜はゆたかにあらんものとなり

るべゆたかに寛なるなり

戀乍毛後将相跡思許増已命乎長欲為禮
こひつゝものちもあはんとおもへこそおのがいのちをながくほりすれ
おもへバこそのバを略けり
今者吾者将死與吾妹不相而念渡者安毛無
いまはあはしなんよわぎもあはずしておもひわたればやすけくもなし
此末まで一首にきこゆるにあり、吾者の者宜なるべし
我背子之将来跡語之夜者過去思咲八更更思許理来目八面
わがせこがきなんといひしよはすぎぬしゑやさら〳〵しこりこめやも
既契おきし夜もすぎてさりしかバ、今よりハ絶じと思ひきらむと、思加何理の加何の約加なると、許る
将して来らむと思ひたれき、されど猶こりずて、様々に其七の意なり

きぬのあきしらずかほよあるしるしハしみさるのさたかくかたはさる
類へいふそのうへをしるさといひて、しるのなるべし、しるさやハ嘆息
のねなり
人言之讒乎聞而玉桙之道毛不相常云吾妹
ひとごとのよこすをきゝてたまぼこのみちにもあはじといへるわぎもこ
惡神紀に讒言をよこしまをさくと訓、さいへるも、あしき垣をおや
ふまりよこしけらしと古人の言あへぬことをしるしけく、あまそこ
あはじといひおこせしんと思ひきれき、宜も言と思ふとそのおもひけれバ
常云ハ絶去の猶まく、みちにもあはずたえいふわぎもこなしんといへり
不相毛懈常念者彌益二人言繁所聞来可聞
あはずともたゆまじとおもへバいやましにひとごとしげくきこえくるかも
あはずとハあはぬを延たる、思へバ猶おもひといふこと

惿ヲ愢ニ誤

里人毛謂告我禰縦咲也思恋而毛将死誰名将有哉

さとびともかたりつぐがねよしゑやしこひてもしなんたが名ならめや

がねの言は兼て後を待意にて後までも語りつぐ人もあるべく言とつゞく全とよめり

よしゑやしハ縦の字をよめり、しなバとてもしなんものをといへる意そ

下ノ句ノ意ハしなバたが名ならんとよめるも同じ

惿使乎無跡情乎曽使尒遣之夢所見哉

たはわなるつかひをなみとこゝろをぞつかひにやりしいめにみえきや

惿字ハ言行相應貞ともあれど惿とせるハ誤也

天地尒少不至丈夫跡思之吾耶雄心毛無寸

あめつちにすこしいたらぬますらをとおもひしわれやをごゝろもなき

天地とハかぎりなく大きなるをいひて丈夫とほこりていへる也 三天ものむ

伏因の武者といへる人といへり

里近家哉応居此吾目之人目乎為尒恋繁口

さとちかくいへやをるべきこのわがめのひとめをしつゝこひのしげゝく

いへやをるべきハ里ちかく家居すべきかハといへり、男女ともに

ふたり居ちかき人目を悩むまことに手為ハ毛里の字なり誤れるか人

目をしのびてといふべし、又於手為尒ハ此山の僧のひとめをいとへといふべし

何時奈毛不恋有登者雖不有得田直比来恋之繁母

いつはなもこひずありとはあらねどもうたてこのごろこひのしげしも

なもハなりとなんといへる同じ、いつもこひしけれど此頃のさかり

あるまで繁きと云、直ハ其のあそびをてといひて、新撰万葉に皆ウタテ直と

あれバ、てのうらに用ひたり、今の俗語のあそびをさしてといへるがごとし

紀ニ玉代ウタテとよめり同じき也

黒玉之宿而之晩乃物念尒割西胷者息時裳無

ぬばたまのいねてしよひのものおもひにさけにしむねはやむときもなし

よひとハ一夜のこと、下ハ明らか、わがむねハさけてくだけてとまるなし

三空去名之惜毛吾者無不相日數多年之經者

みそらゆくなのをしけくもわれハなしあはぬひまねくとしのへぬれバ

みそらゆくハ名の序也、古今集に為、あまつそらなる人をこふとて

とは此歌に似たり、逢ずて久しくなりぬれバ、名をしむこころもなし、年月經る

をいふまねくハ數多キヲいふ、例多し

得管二毛今見牡鹿夢耳手本纏宿登見者辛苦毛

うつつにもいまもみてしがゆめのみにたもとまきぬとみるハくるしも

現にて今見ん、夢のみに見るハ、牡鹿ハ借字也

されどかと訓べし

或本歌發句云吾妹兒乎

立而居為便乃田時毛今者無妹爾不相而月之經去者

たちてゐるすべのたどきもいまハなしいもにあはずてつきのへぬれバ

たちてもゐてもせんすべのなきなり

或本歌云君之目不見而月之經去者

不相而戀度等母忘哉彌日異者思益等母

あはずしてこひわたるともわすれめやいやひにけにハおもひますとも

年月逢ハずとも、忘れめやハと、いひてまた、日にけにハ思ひますともとなり

外目毛君之光儀乎見而者社吾戀山目命不死者

よそめにもきみがすがたをみてばこそわがこひやまめいのちしなずハ

かくて恋死もしなずハ、よそめにも君を見てあらバこそ、恋の止むこともあらめ

むなしくこひやまんといふなり

匣ヲ匣ニ誤

一云 壽向吾戀止目（イノチニムカフワガコヒヤマメ）　そは今たえ川くる下の句あるとはへの句へ入るべし

戀管毋今日者在目杼玉匣将開明日如何将暮

こひつゝもけふはあらめどたまくしげあけんあしたをいかでくらさむ

あふこともなく、まちて後、こふしきゆゑくるしかるべし、空あけ

明日ハ明旦の注あるべし下につて

左夜深而妹乎念出布妙之枕毛衣世二嘆鶴鴨

さよふけていもをおもひでしきたへのまくらもそよになげきつるかも

そよハ嘆声、とよとよ枕動くといひ、又声する、此度のひとりねるま

でなげきつるをもちいてるとあへり

他言者真言痛成友彼所将障吾爾不有國

ひとごとはまことこちたくなりぬともそこにさはらんわれならなくに

人いひさわぐともそれにさはられて思止べき我にハあらじぞとよ

立居田時毛不知吾意天津空有土者践鞆

たちてゐるたどきもしらにわがこころあまつそらなりつちはふめども

あはれなり、東ハ今十一にてよしありつちハふめどもそらにある同じ

世間之人辭常所念莫真曽戀之不相日乎多美

よのなかのひとのことばとおもほすなまことぞこひしあはぬひをおほみ

大方の人の情いつはりとのみ思ひするを云ふぞ見ればまことに恋しきと

気知如何吾幾許戀流吾妹子之不相跡言流事毛有莫國

いでいかにわがこゝだくこふるわぎもこがあはじといへることもあらなくに

いでハ發語、往よをとぞよあるす あるより、妹がひとふするにあらずきこ

もいふぬといへれバよく そこばくこふるらんと自らいぶかるく

夜干玉之夜乎長鴨吾背子之夢爾夢西所見還良武

ぬばたまのよをながみかもわがせこがいめにいめにしみえかへるらむ

玉のをなかくとや、来経りし年月の長きにたへんといへる、いのちの一ハ曲語

荒玉之年緒長如此戀者信吾命全有目八目

あらたまのとしのをながくかくこひばまことわがいのちまたからめやも

年月長くかくのみ恋ばまことに命も全からじと也

思遣為便乃田時毛吾者無不相數多月之經去者

おもひやるたどきもわれハなしあはずてあまたつきのへぬれバ

思ひをやるべき便もなき也、あはずて、不相の下日と見しハ、あまたの日もまたずといふ例也

朝去而暮者来座君故爾忌忌久毛吾者歎鶴鴨

あしたゆきてゆふべハきますきみゆゑにゆゆしくもわはなげきつるかも

きみなるハ、男をさしてのこと也

従聞物乎念者我胸者破而摧而鋒心無

きゝしよりものをおもへバわがむねハわれてくだけてとごゝろもなし

妹が名をきゝしよりかくと也、鋒心ハとごゝろとよむべし

人言乎繁三言痛三我妹子二去月従未相可母

ひとごとをしげみこちたみわぎもこにいにしつきよりいまだあはぬかも

いにし月ハ前月也

歌方毛曰管毛有鹿吾有者地庭不落空消生

うたがたもいひつゝもあるかわれならばつちにハおちずそらにけなまし

うたがたハ潦水のうかべる泡のことにて、空像といふをうたがたと訓るなるべし、あやふくはかなき意にたとへたる也、十五卷十一丁に見えたる、妹ハ実あやふげに
いへども、我ならば、うちすてハせじとの意也、橘氏ハ、歌方も云々の
のたまふ言ハ、おぼつかなき実の無しのたまふことのあやふさを、土に落ずして、空にきえむ、
地に落ると落る土をいふなるべし、なほ考ふべし、信るや、今

夫子とせしは誤なるべし、生ハ共の字の誤なり、そはゆふなぎをともにとよ
しかるべし、さらずハ杼をやきとのべし

何日之時可毛吾妹子之裳引之容儀朝爾食爾将見

いつのひのときにかもわぎもこがもびきのすがたあさにけにみん

いつのひのときにかもは、いつの日の何時にかもといふ也、考にいつのひのときといふも、日の何時にかもと云こと也、食ハ借字也

獨居而戀者辛苦玉手次不懸将忘言量欲

ひとりゐてこふればくるしたまだすきかけずわすれんことはかりもが

人をいふ心をかけずして、わすれんことのおもひきりもあれかしと也
人忘れんやうもあらばせよといふなり

中中黙然毛有申尾小豆無相見始而毛吾者戀香

なかなかにもだもあらましをあぢきなくあひみそめてもわれはこふるか

吾妹子之咲眉引面影懸而本名所念可毛

わぎもこがゑまひまよびきおもかげにかかりてもとなおもほゆるかも

赤根指日之暮去者為便乎無三千遍嘆而戀乍曽居

あかねさすひのくれゆけばすべをなみちたびなげきてこひつつぞをる

赤ねさす枕詞、日のくれてはいとゞ恋しく思ふ也

吾戀者夜晝不別百重成情之念者甚為便無

わがこひはよるひるわかずももへなすこころしおもへばいともすべなし

百へなすのなすハ如くといふ意なる用ゐるとハ違へり考へ見べし

五十殿寸太薄寸眉根乎徒令掻管不相人可母

いとのきてうすきまゆねをいたづらにかゝしめつゝもあはぬひとかも

大ハ天の字の誤なるべし、いとのきてハいとゞしくといふに同じ、考に事十四
にもいとのきて、短き物の下毛の字脱しの

戀戀而後裳將相常名草漏心四無者五十寸手有目八面
こひ〳〵てのちもあはんとなぐさむるこゝろしなくハいきてあらめやも
ほと逢んとこゝろ思ひなぐさめてをるゝ之
幾不生有命乎戀管曾吾者氣衝人爾不所知
いくばくもいけらじいのちをこひつゝぞわれハいきづくひとにしらえずて
いきづくハちゝとつきてなげくをいふ。思ふ人にしられずて独のみ恋するゝ
他國爾結婚爾行而太刀之緒毛未解者左夜曾明家流
ひとぐにゝよばひにゆきてたちのをもいまだとかねばさよぞあけにける
ひと国ハ他る国を離れて遠きあたりをいふ。古事記に将婚高師国之沼河比賣
幸行之時到其沼河比賣之家歌曰ちて佐用婆比迩阿理多々斯用婆比迩
阿理加用婆勢多知賀遠母伊麻陀登加受弖於須比遠母伊麻陀登
加泥婆などとあるをとりてよめるなり。かのくさ〳〵ねもころにいへる太刀緒式衛
府舎人刀緒左近衛緋絁右近衛緋纈左兵衛深緑右兵衛緑纈左門部浅縹
右門部浅縹纈ならん
丈夫之聡神毛今者無戀之奴爾吾者可死
ますらをのさときこゝろもいまハなしこひのやつこにわれハしぬべし
さときハ今もとどきといふ。とどきハ進疾の略。恋を使ひし奴と
して恋ハ我をつかふなりとく
常如是戀者辛苦暫毛心安目六事計為與
つねかくしこふるハくるししまらくもこゝろやすめんことはかりせよ
ことハかりせよハことゞもりて下知するやうにいひおくれるこゝろ。計とハ許ノ誤なるハ
誤れるなるべし
凡爾吾之念者人妻爾有云妹爾戀管有余也
おほろかにわがおもはゞひとづまにありといふいもにこひつゝあらめや

計ラ許二誤

心者千重百重思有杼人目乎多見妹爾不相可母

こゝろはちへにもゝへにおもへれどひとめをおほみいもにあはぬかも

人目多見眼社忍禮小毛心中爾吾念莫國

ひとめおほみめこそしのぶれすくなくもこゝろのうちにわがもはなくに

人めをしのべバこそあはざらめ心のうちにハわすれずとなり小官なおすに似る

人見而事害目不為夢爾吾今夜将至屋戸閉勿勤

ひとのみてことゝがめせぬいめにわがこよひいたらんやどさすなゆめ

事ハ言へ遊仙窟今宵莫閉戸夢裏向渠邊

何時左右二将生命曽凡者戀乍不有者死上有

いつまでにいかんいのちぞおほかたハこひつゝあらずハしぬるまされり

こひつゝあらずて死なく上有をまさると訓り

愛等念吾妹乎夢見而起而探爾無之不怜

うるハしとおもふわぎもをいめにみておきてさぐるになきがさぶしさ

考ニ夢のあひハかくしかりしのきさぐれどもなけれバさぶし

よめり

妹登曰者無禮恐然為蟹懸巻欲言爾有鴨

いもといへばなめしかしこししかすがにかけまくほしきことにあるかも

考然をしかすがとよむこと、なれをなれともつの孝徳紀に軽とな

めし訓せ、おもしろがハかうしなずらうを造りて、妹とのいふすを言に知つくいひ

むかしほつき也

玉勝間相登云者誰有香相有時左倍面隠為

たまかつまあはんといふはたれなるかあへるときさへおもがくしせる

玉勝間ハ枕詞、考ニ玉のまくあれど、雅ニ例ニなし、あんといひな

こせし前ちるぞ、妹がいひおこせしをてハかくこう、さるよしを今何ゝ集て

句ぐしせるよし女のさまをいふ也

寤香妹之来座有夢可毛五口香惑流戀之繁雨

うつゝかいもがきませるゆめにかもわれのまどへるこひのしげきに

女のうつゝかゆめかと疑ひたるなり

大方者何鴨将戀言擧不為妹爾依宿牟年者近侵

おほかたはなにかこひんことあげせずいもによりねんとしはちかきを

侵一本後とあるをのちと訓べし。さればちかきを…

てとよめるに浸とあるが侵なるべし妹が父母のゆるさぬをいつまでもかくてあるべきにあらねば…をと

二為而結之紐乎一為而吾者解不見直相及者

ふたりしてむすびしひもをひとりしてわれはときみじたゞにあふまでは

いせ物がたりにまさしく此歌を出せり

終命此者不念唯毛妹爾不相言乎之曾念

しなんいのちはおもはずたゞしもいもにあはざることをしぞおもふ

こりしてはよく命はいとはでと言ふなり

幼婦者同情須臾止時毛無久将見等曾念

をとめこはおなじこゝろにしばらくもやむときもなくみてんとぞおもふ

をとめこは…或人説幼婦者は紐緒の誤なりといへり猶考べし

夕去者於君将相跡念許憎日之晩毛惧有家禮

ゆふさらばきみにあはんとおもへこそひのくるゝこともうれしかりけれ

惧は嬉と同字

直今日毛君爾波相目跡人言乎繁不相而戀度鴨

たゞけふもきみにはあはめどひとごとをしげみあはずてこひわたるかも

社ヲ杜ニ誤

直ハたゞちの事、おなじくハあふべかれども

世間爾戀將繁跡不念者君之手本乎不枕夜毛有寸

よのなかにこひしげけんとおもはねばきみがたもとをまかぬよもありき

古作よのなかにあれど翁ハ、宣長云よの中ハよのなかと訓べし、よのなかにハ生て

在内あひ、わが生涯のほどは、かくこひんとハおもはざりしのはのこと

いへり、巻十一如是許(カクバカリ)こひん物ぞとしらませばいもをバ見ずもあらまし

ましものを、古本ハこれ十一の巻ハあらまし此歌のたぐひ一云とて作

ふり

緑兒之為社乳母者求云乳飲哉君之於毛求覧

みどりごのためこそおもはもとむといへちのめやきみがおもほもとむらん

今本為杜とあるハ誤れり、杜のいみハ何ぞやや一本社に作るをよしとす

乳母ハ知毛と訓べけれど、田中ハを下に於毛とあるに従くべしとて

おもと訓べし、和名抄乳母をめのとといへる也、母をおもといへるハ

集中に多し、乳母とハ知於毛ともよめど、思ひてそれをも於毛とのみいへり

古事記取御母(ミオモ)定湯坐若湯坐とあるも乳のおもハ乳のおもなれば、此おもハ

かく逢し女ハ、これて男のこと乳母とよばずして他女(アダシメ)をよぶにいへるにて、お

の女の少くて、弱く幼きをいへるなるべし

梅毛老爾来鴨我背子之求流乳母爾行益物乎

くやしくもおいにけるかもわがせこがもとむるおもにゆかましものを

此歌も上と同じく女のよめるなり

浦觸而可例西袖叫又巻者過西戀也亂今可聞

うらぶれてかれにしそでをまたまかばすぎにしこひやみだれこんかも

うらぶれてハさびてと云ふ、一ふたび離れしをいふ、まくて、むかしのめぐみ忘れるんといへ

今ハ言を用ゐるうたなりて将来と

各寺師人死為良思妹爾戀日異羸沼人丹不所知
おのがじゝひとしにすらしいもにこひひにけにやせぬひとにしらえず
おのがじしハ各自の事、後のしハ未考つぎに、後撰源氏物語抄なる詞の
ひとしにすらしのすゝちかをして、おのがじしさへづるこゑをしらさらむ
しハ令義らしき、此人ハ己を思ふこゝろ人ことをのみ恋ひやせんよしなるを、
猶恋ひ死なんとするなるべし
夕々吾立待爾若雲君不来益者應辛苦
ゆふべゆふべされもちまつはりくるしきみきまさずハくるしかるべし
かくもやうのまちハけしくてもあらん
生代爾戀云物乎相不見者戀中爾毛吾曾苦寸
いけるよにこひといふものをあひみねばこひのなかにもわれぞくるしき
いまでハ無くちゝねてといふ細かなる人ハをとりきこえていたんといへることに

念管座者苦毛夜干玉之夜爾至者吾社湯龜
おもひつゝをればくるしもぬばたまのよるにならばわれこそゆかめ
もやもありはなひつをれバくるしきよるとなりし、母のこと
情庭燎而念杼虚蝉之人目乎繁妹爾不相鴨
こゝろにはもえておもへどうつせみのひとめをしげみいもにあはぬかも
うつせみの枕言ば
不相念公者雖座肩戀丹吾者衣戀君之光儀
あひおもはずきみはますともかたこひにわれはぞこふるきみがすがたを
ませんとハいますとめぐく、肩ハ片也
味澤相目者非不飽携不問事毛苦労有来
あぢさはふめにはあけどたづさはりこととはなくもくるしかりけり
あぢさはふハ枕詞、あそこよりつくの詞むつびく物りつるをきこ

こゝハなくハてもしぬるをいとふもひハなるゝ[illegible]

璞之年緒永何時左右鹿我戀将居壽不知而

あらたまのとしのをながくいつまでかわがこひをらんいのちしらずて

[illegible]

今者吾者指南與我兄戀為者一夜一日毛安毛無

いまハもハしなんよわがせこひすれバひとよひとひもやすけくもなし

[illegible]

[illegible]

白細布之袖折反戀者香妹之容儀乃夢二四三湯流

しろたへのそでをりかへしこふれバかいものすがたのいめにしみゆる

[illegible]

人言乎繁三毛人髪三我兄子乎目者雖見相因毛無

ひとごとをしげみこちたみわがせこをめにハみれどもあふよしもなし

こちたみハ言痛[illegible]

[illegible]

[illegible]大臣を毛人とかく

戀云者薄事有雖然我者不忘戀者死十方

こひといへバうすきことなれどしかれどもわれハわすれじこひハしぬとも

[illegible]

[illegible]

中中二死者安六出日之入別不知吾四久流四毛

なかなかにしなばやすけんいづるひのいるわきしらぬわれしくるしも

[illegible]

[illegible]

きはまよかけ合べし

念八流跡状毛我者今者無妹二不相而年之經行者

おもひやるたどきもしられいまはなしいもにあはずてとしのへゆけば

よる思遣為便乃田時もなしとよめるよりて跡状たどきと訓べし

吾兒子爾戀跡二四有四小兒之夜哭乎為乍宿不勝苦者

わがせこにこふとふしあらしみどりこのよなきをしつゝいねがてなくは

みどりこのしかゆ婦をいはずてなくかくねかてぬるほどの思ひあらぬべし

せこを恋てか哭て寝ぬるといへる

我命之長欲家口偽乎好為人乎執許乎

わがいのちのながくほしけくいつはりをよくするひとをとらふばかりを

との一句手をるいつはりをよくするひとは度々逢はんといひてまたあはぬ

人をとらふるは迷るの道理なるを稱く妻の言をうらみて哉なる

人言繁跡妹不相情裏戀比日

ひとごとをしげみといもにあはずしてこゝろのうちにこふるこのごろ

文の意人言執ハ報の語にてむくゆるこゝろをもちんといへるなるべし

此意人麻呂集の歌に執くこゝろましきなるべし

玉梓之君之使乎待之夜乃名凝其今毛不宿夜乃大寸

たまづさのきみがつかひをまちしよのなごりぞいまもいねぬよのおほき

巻十一巻十二の句々されば先さまかんとして未今日との旨たるゞらのまゝ

そこふいつり後と使給ふる人其とぞのうらまで用ゐるかあらん巻十四に

此例有大ハ後よく更のごとく

玉梓之道爾行相而外目耳毛見者吉子乎何時鹿將待

たまづさのみちにゆきあひてよそめにもみるはよきこをいつとかまたん

みちゆかんは時を待つ雲くめるかさん見るはよきこをの言いまさらおきされどなく

ハしおもきことよあれバかくいひけるなん
念西餘西鹿齒為便乎無美吾者五十日手寸應忌鬼尾
おもふにあまりぬるわびしさをなぐさむるわれハいひてきいむべきことのもと
巻十一四の句人に語つげかけるのことく全同うの首なり、此まちのかたといひ
てさりかの望来んことをいふなん
或本歌曰門出而吾反側乎人見監可毛一云無乏出行
家當見　一云ともなふ可云とも一本よりあくね
柿本朝臣人麻呂歌集云爾保鳥之奈津柴比来乎人見
鴨
古本門出而云々のことを本文に略きていふをハなやし伏之云々可云無之
ことをいふなり人見鴨といふまで古本なりし尓保鳥之云々の本ハ巻十一
人麻呂集の中の念に伴ひつつ丹穂鳥足沾来人見つんとしるをと語傳へて、

執とんころを峯しれるべし
明日者其門将去出而見與戀有容儀數知兼
あくんひいぞのかどゆのん、いぞしみよこひねるもぞゆくあまりにまるけん
こゑ色立まやつれさるさまハ、そこりくまるのくんと、出くりえよとえ
得田價異心欝悒事計吉為吾兄子相有時谷
うるがへるこころいぶせしことはのみよくせわがせてあへるときだに
異ハ果の字の誤なるべし、うらぶれるハ男の女の心を疑ふて、いぶせしハそこころ
がりてをりずせく思ふて、よく思ひ言くえバ疑ひハあしじと、たまくくの
すぶふ、おとらけざるが苦しといふて、よくせハよくせよといふを思ふたえの縁へ
吾妹子之夜戸出乃光儀見之従情空成地者雖踐
わぎもこがよとでのすがたみてしよりこころそらなりつちハふめども
巻十一朝戸出のすがたよりて朝戸出もたちほど、まこるハ巻十一もよあり、貝かず

官本市の字なし

海石榴市之八十衢爾立平之結紐手解巻惜毛

つばいちのやそのちまたにたちならしむすびしひもをとかまくをしも

つば市大和、武烈紀弘計皇子命の石榴市の歌垣に出給ひしハ清寧天皇の忍海宮のあめのした知らす程のかぐろふの日紀るにさりハ細麗なるにて

城上郡金屋村の山下、つば市の地名といへり、又国村につばいづこと

は家なとぞ、行考べし。これハ男女集りて歌垣する時、結びし紐を

解まじくちぎりしるしなるべし。君までハいとどと結びし紐をとかれぬ男と云ハ解れど、

又化し男の為に解くハ心ゆかぬよしと

吾齡之衰去者白細布之袖乃狎爾思君乎母准其思

わがよハひしおとろへぬればしろたへのそでのなれにしきみをしぞおもふ

唯ハ衍文なるべし。袖のなれしとハ年経て袖のなれしとその男の訓なり

とを兼ひて君に契りし数の日どろへ約せしつけて、君をしるしのとけて

たのむるをといへり。年十一月の日のやしほの衣私ぬさせさるなれハ手ませれどいや

是つくしもよらに数も

戀君吾哭涕白妙袖兼所漬為便母奈之

きみこひわがなくなみだしろたへのそでさへぬれてせんすべもなし

泪ハ血のなみだとそそく袖さへといふ

従今者不相跡為也白妙之我衣袖之干時毛奈吉

いまよりハあはじとすれやしろたへのわがころもでのひるときもなき

君があはじともするに泪のつゆ落るらんといふなり

夢可登情斑月數多二干西君之事之通者

いめのごとこころわのめやつきさはにかれにしきみがことのかよへば

壁の下毛の事にして斑とすハ御のぞ、怯の径なく、あやしとぞいふ

官本二の句をしつきまねくと訓べし、然れては又言信なるべし

未玉之年月無而烏玉乃夢爾所見君之容儀者

あらたまのとしつきかねてぬばたまのいめにぞみゆるきみがすがたは

かねてハ年月をへてといふ意なるを

從今者雖戀妹爾將相哉母床邊不離夢所見乞

いまよりハこひすともいもにあはめやもとこのへさらずいめにみえこそ

妹ニ不来年ニ付ることなるべし

人見而言害目不為夢谷不止見與我戀將息

ひとのみてことゝがめせぬいめにだにやまずみえこそわのこひやまん

與ハ乞の誤なるべし、みえこそハ見えよとねがふ辞、よそも人のとがむることなく

せぬいめよとよみたり

或本歌頭云人目多直者不相

現者言絶有夢谷嗣而所見而直相左右二

うつゝにハことたえたりいめにだにつぎてみえこそたゞにあふまでに

而ハ乞の誤なるべし、見而の而ハ衍字、校本によるに乞の誤なるべし

虛蟬之宇都思情毛吾者無妹乎不相見而年之經去者

うつせみのうつしごゝろもわれハなしいもをあひみずてとしのへぬれば

うつせみの枕詞、うつしハ現し心なり、いきてなきさまのなきさま

虛蟬之常辭登雖念繼而之聞者心遮焉

うつせみのつねのことばとおもへどもつぎてしきけばこゝろハなぞぬ

うつせみの枕詞、よのつねのことゝハおもへども、つぎてきけばなぐさむるを

遮ハ遮断のさまくなりとむかるべし、官本遮焉を遮焉とて心あやしく

遮ハ慰の誤也、ま四直一春傷しろをあるものゝ久しくなぐさみぬるを心遮といふハ

遮の上に不の字落たるか、ある本にハなぐさもとあり、されど甚心の

是ハ語をかへてよめるハ乎

白細之袖不數而宿烏玉之今夜者早毛明者將開

しろたへのそでまかずてぬるぬばたまのこよひハはやもあけばあけなん

數ハ卷の字の誤にて借たるなるべし或人云數をとりてまくとよむハまくめくとこそいへるがごとし

そでまかずと訓んよりて古度とあるハ袖を纏ハ誰もめでたくハいはずてぬ

ていふなりとぞ官本不數の下而の字なきをよしとす

白細之手本寛久人之宿味宿者不寢哉戀將渡

しろたへのたもとゆたけく人のぬるうまいハねずやこひわたりなん

うまいハこゝろよくぬるを云

寄物陳思

如是耳在家流君乎衣爾有者下毛將著跡吾念有家留

かくのみにありけるきみをきぬならばしたにもきんとわがおもへりける

かく疎きことハ志らで肌をもはなさずあらんと思ひしを悔るなり卷十六如是有家

流けるそのをとい

橡之袷衣裏爾爲者吾將強八方君之不來座

つるばみのあはせごろものうらにせばわれしひめやもきみがきまさぬ

令義解に橡ハ櫟木ノ實也和名抄橡都流波美櫟実也とあれば其どんぐりといふ

物の外の皮を煮たる汁もて染たる[illegible]

衣服令に橡墨染を家人奴婢の衣の色とあれバ是ハ賤き人

の衣也かくてよめる衣なり袷ハうらあれハ裏といはん料にいへるのみなり

うらとハうらみをとりなして表をハ裏とせじ表にはむなし[illegible]

もまかせといへるに我ハまさねども恨てあるべきと[illegible]

このうたの意ハ賤の[illegible]あはせのうらてふあかぬと訓て[illegible]

ひとりいひくらひあやぶむ[illegible]そのこといふ[illegible]

まくまませかし。悲しく、あやぶむすがたならば深くかくすまませといふんや。然こ

に君は物あつかふらくまきぬるすまふんといふ物なるべし

一紅薄染衣浅尓相見之人尓恋比日可聞

くれなゐのあらぞめごろもあさらかにあひみしひとにこふるころかも

次に桃花褐（アラゾメノ）浅等乃衣浅らかにとある同じく、あさらかといひて

むかしのいもはいめにはすがたもちかくまもりにいへり。又はわがこの情をあふく、

人の心をえるんとしてぬといへるなるべし

年之経者見管偲登妹之言思衣乃縫目見者哀裳

としのへばみつゝしぬべといもがいひしころものぬひめみればかなしも

様よるまで、妹が縫し衣をみてくかなしむなるべし

橡之一重衣裏毛無将有兒故恋渡可聞

つるばみのひとへごろもうらもなくあるらんこゆゑこひわたるかも

裏もなくとつくんぞて一重といへるのこゝろもちなくふかの心ろおかしてなく

らかすこゝと、子為はなるものとし

解衣之念乱而雖恋何之故其跡問人毛無

ときぎぬのおもひみだれてこふれどもなぞのゆゑぞと問ふ人もなし

ときぎぬの枕詞、恋る人のいのちまでもうへしとせんでとがねぞ、是十一

にこの句何如汝之故跡（ナゾナガユヱト）とて全同じあり

桃花褐浅等乃衣浅尓念而妹尓将相物香裳

あらぞめのあさらのころもあさらかにおもひていもにあはんものかも

布を桃花色の薄紅に染るを荒染といふ、褐は布衣之式に凡綿

布之衣者雖退紅（アラゾメ）自非軽細不在制限とありて、紅次第に荒染といふ、

上は序にて、まるゝを収てよめる也。さもいかいの事

大王之塩焼海部乃藤衣穢者雖為弥希将見毛

おほきみのみこやくあまのふすところにあれなれどもいやめづらしも

咩ハ娘ところを始めて、公の侍抱きるを田祖に仰しされバ、のぐいつこ武烈紀に供侍の咩ハ角鹿に偲をする、先に傳く大男の咩ていつへきうれども此紀にえくしのさまく作る不えちしまちかうし内膳式をぞんふもふて云るあられバ、大ちハ一町のまちあらん、衣の袂をく娘に訓るよいひ下しる序のこ

赤帛之純裏衣長欲我念君之不所見比者鴨

あかぎぬのひたうらころもながくほりわがおもふきみがみえぬころかも

紅といはで赤帛とよるハ緋色の衣之表裏ともに赤色なるをひたうらといへるのふ、与ちよハられるあのくて、長ハ著の字の係あるべし、きつうハきまくほつ列べし、此男緋色の表衣ほしきを見く来るよし、おたるのまさを云く度まりとよする、人くてぞよのうて、まきて口説はねのみひ表まゆの衣ハあれど君のみろし、あやなき所かしからねね

紐ヲ級ニ誤下同

して手ねえまりきく

真玉就越乞兼而結鶴言下紐之所解日有米也

まくまつくをちこもちかねてむすびつるわがしたひものとくるひあらめや

まむて極緒とちこちかねてにそよきまをかけく契ておびしとうて言と五日のまする見きる不あし

紫帶之結毛解毛不見本名也妹爾戀度南

むらさきのおびのむすびもときもみずもとなやいもにこひわたりなん

次まこ紫の下紐とおりしうバ君も下の紫ちゞく、紐といひしも一、古人おび紐結と通りしもいひ、解もうどのつくところなし

齋ヲ齊トセリ

高麗錦紐之結毛解不放齋而待杼驗無可聞

こまにしきひものむすびもときさけずいはひてまてどしるしなきかも

こま錦極緒、二人しておびし紐をとくのぞいはひつしみて待るハ我の

きよしのみそぎするをば誤れるならんと訓て、齋と七齋とせり、六条本に依
て改

紫我下紐乃色爾不出恋可毛将痩相因乎無見

むらさきのわがしたひものいろにいでずこひかもやせんあふよしをなみ

紫の色よきといひかけて、いろにいでずといはんとて、下紐ハいろに出ぬ物にて、上ハ色に出し
てん序のこゝろいひもやせんハ恋痩なんといふにて、もハ助辞

何故可不思将有紐緒之心爾入而恋布物乎

なにゆゑかおもはでありなんひものをのこゝろにいりてこひしきものを

かく紐の緒とつゞけしハ、紐の緒とて結ぶにて、心に入るといふハ、
紐の緒ハ男の兒が紐をかくとも聞え、思ふ心に入とハ、
女を心に結びしのべかへるおもひてんこゝろひく、物思ふ心にと
きしみて結びとへ思へとせり

真十鏡見座吾背子吾形見将持辰爾将不相哉

まそかゞみみませわがせこわがかたみもたらんときにあはざらめやも

是の歌ハ鏡を贈りて旅ゆく女のよめる也、古事記天孫降臨の時、天照
大御神神寶をさづけ給ひて、此鏡ハ専ら我が御魂として吾前を拝むがごとくいつきまつれ
しよし、鏡をば魂のごとくなるものとして、後世の形見にせしなるべし
されば見ませとハ、あが形見の鏡をもたらん時に、めでたき宮所に
辰にハ時といへり、辰ハ君の旅ゆく、されば君がわが形見を持たらん
にあはざらんやハあはんといへり、鏡に寄る

真十鏡直目爾君乎見者許曽命對吾恋止目

まそかゞみたゞめにきみをみてばこそいのちにむかふわがこひやまめ

此まそ鏡ハ枕詞也、みてばこそハ見てあらばこそなり、命に向ふハ命にかへて
思ふ命に對ふとつゞきて、切なる思ひも、一たび直目にあひてこそ

あるは止もせんと

犬馬鏡見不飽妹爾不相而月之經去者生友名師

ますかゞみみあかぬいもにあはずして月のへぬればいけりともなし

祝部等之齋三諸乃犬馬鏡懸而偲相人毎

まそかゞみ挂而

はふりらのいはふみむろのますかゞみかけてぞしのぶあふひとごとに

上ハ神の社に鏡をかくるをいへり、かゞみをいはん為とせり、契沖ハ相をみると訓て見し知る人或ハ同じほどなる心きゝ人あるひハ去るが故及ぶ乎訓とそれぞれなる人をみけく、おもひ出ずよしといへり、宣長ハ毎を皆あふひとごとにと訓く、言ハ契沖がいへるがごとかるべし、さんぞてたれにまれ人にあふごとに、見つるを思ひ出て、なほかけて、しのぶといふ、これよろしかるべし、齋とく齋ハ花る友やふよませね

針者有杼妹之無者將著哉跡五日手令煩絶紐之緒

はりはあれどいもしなければつけめやとわれをなやましたゆるひものを

結ハ緒にあるなるべし、妹のなければ、えつらじされをなやましてやらに、紐の緒の絶るをいふ、本緒を結に誤、官本及一本によりて改ぬ

高麗劔己之景迹故外耳見乍哉君乎戀度奈年

こまつるぎわがこゝろゆゑよそのみにみつゝやきみをこひわたりなん

こまつるぎ枕詞、天武紀に景迹をこゝろばせと訓、今も此字を行迹のこゝろに依てこゝろと訓べし、されハ契沖もこゝろとあり、今の考ハ、宣れども、宣長ハよしなしこゝろのえんとはあるべし、其の訓かげゆゑとよめるよしく、冠辞考にもかくあるに出されたれど、是れにも劔大刀己之心柄とつゞけたるをおもへても知べし

劔大刀名之惜毛吾者無比来之間戀之繁爾

つるぎたちなのをしけくもわれはなしこのころのまのこひのしげきに

つるぎたち枕詞

梓弓末者師不知雖然真坂者君尓縁西物乎

あづさゆみすゑはしらねどしかれどもまさかはきみによりにしものを

一本歌云梓弓末乃多頭吉波雖不知心者君尓因之物乎

梓ゆみ枕詞、末ハのちの事、まさかハまさに今也、一本のたづきハ末のおぼつかなくの心にてよろし

梓弓引見緩見思見而既心歯因尓思物乎

あづさゆみひきみゆるべみおもひみてすでにこゝろはよりにしものを

梓弓ハ譬にいへり、縦一本綏に作る、よるを思ひ定めてよりしと也

梓弓引而不縦丈夫哉恋云物乎忍不得牟

あづさゆみひきてゆるべぬますらをやこひちふものをしのびかねてん

梓弓ハ次の末をいはんためにて、ことに意なし

梓弓末中一伏三起不通有之君者会奴嗟羽将息

あづさゆみすゑのなかごろたえたりしきみにはあひぬなげきはやめん

一伏三起ハ古へ弓射る時のことにて、下に梓弓たてゝかくいへり、いにしへ弓には起伏ありて、古へ多くいへり、又略解に弓いる時に弓たふしとなすをいふ、くのたぐひなりて弓を出しおこすゆゑに、とかるを射んとする時、先前を見あやまりぬるゆゑ、ためのことを一伏と起といふ。とふさし起こして末を射れど、引たわむる所ハ中なれば、末中といふ、男の中に、ためひて通はざりし事をたとへし、例て、○義山伏起のうちを射挙しくいへり、古へ弓射しことを考ふるに、弓ハ引役て後にねらひて、ふむるてえとなり、射んとする時ハあまねくしひを定むる人あるにや、神のまどはくはし、めぐるにも、わざハ弓をとりて一度起し、後に伏て的をよくみて、又起て

矢をもちげ、又はさるく起てゆくなるに、一伏三起といふなるべしといへれど、
定本に末中一伏三起不通有之は、古点のなつごころよめりしによるべし、
六帖に、かくらりんあと書かせば、あづさゆみ末中でろあひしてけりと
よめといへり、集中十、暮三伏一向夜とゆふづくよと訓、集中三に根毛一伏三向とあるも、
ころとよめるにならへば、是も此の訓によらしかるべき也、猶考ふべし、集中十
三にも委しくいへり

今更何牡鹿将念梓弓引見縦見縁西鬼乎

いまさらに何かおもはむあづさゆみひきみゆるしみよりにしものを

まに罟の緑を梓にたとへたる時、女のよめるなるべし

𡡉嬬等之續麻之多田有打麻懸續時無二戀度鴨

をとめらがうみをのたゝりうちそかけうむときなしにこひわたるかも

今義解綫柱、集解に多々利とあり、和名抄に絡𪔠しるす、和名たゝりと訓、

蚕篇海ニ俗用蝅蠒字ト有古ヘヨリシカルカ

一つもくうむ所を以ひつるものくかし麻は美くしき麻のよきをいふ、つけ、辞
考にいふ、上句はうむといはん序にて、とよのつきは麻を績をいて、そのうを
は續付ることを、績一本績を絶たくとし

垂乳根之母我養蚕乃眉隱馬聲蜂音石花蜘蛻荒鹿異母二不相而

たらちねのはゝがかふこのまゆごもりいぶせくもあるかいもにあはずて

蚕のまゆにこもりてあるをいぶせき譬へにし、馬聲蜂音はいぶ、石花は和名抄に蜘蛛子
のうらにかるもし、石花は和名抄に蜘蛛子とあれば、集中せのうこのに同

玉手次不懸者辛苦懸垂者續手見卷之欲寸君可毛

たまだすきかけねばくるしかくれば、つぎてみまくのほしきなみかも

此歌は思ひかけるにはあらで、既に逢しるを、猶も相見まほしく思ふにて、

紫綵色之蘰花八香爾今日見人爾後将戀鴨

むらさきみそめてしつゞらをきやなりてみるたゞよふのちとしらんのも

いうづゞハむらづゝく、むらづゞハむと見ゆく引く也あまりつゝく肝釋をくなり、

も思ふ故をまゝうつさむ花や、うれしきこゝ花ハうるはしきに似く、やうハ詞く

玉鬘不懸時無戀友何如妹爾相時毛名寸

たまかづらかけぬときなくこふれどもいかにかいもにあふときもなき

むかづら枕詞、かけぬ時なくハ、絶ゆる時なく

相因之出来左右者疊薦重編數夢西将見

あふよしのいでくるまではたゝみこもへだてあむかずいめにしみてん

十一巻にも僑あむこのかずかよひせば道のしばくさおひざらましといふ

白香付木綿者花物事社者何時之真坂毛常不所忘

しらかつくゆふハはなものこともこそハいつのまさかもつねわすらえね

白かつく枕詞、物ハ總のまゝの意をあらはしてむ坂とて枝に似るハ語なる、

まさこハ集中當時しきかへそのまゝといふ事也いつまでもあるべきの時

みいへるハたのむしと思ふよ、その外にあるハ本集と同じ見るなりく

意うるとしかいかさく翁のいふれきされどそのことよくしゆかうらし、

考べし

石上振之高橋高高爾妹之将待夜曽深去家留

いそのかみふるのたかはしたかだかにいもがまつらんよぞふけにける

崇神紀八年高橋邑人活日云々、武烈紀にも伊須能箇美布屢を云々

まくら拖箇播志須疑云々、大和山邊郡石上布留神社のあたりの橋なるべし、

さてよハたかくしいふ事に高くハ遠きさまハしもとけ遠ふかくこ

とある詞之妹がまつらんものを思ふなりらんかのと遥く遠くして夜の

更行めるをわぶる也

湊入之葦別小船障多今来吾乎不通跡念莫

みなといりのあしわけをぶねさはりおほみいまこんわれをよどむとおもふな

一二の句は譬へにいへる序のみ、巻十一なるは今同じく、末は我が思ふ君があはぬころ
のもと有、こなたはやがて行んと思ふまで、こは障おほくてつかへてけるといへること、この句は人々
まで八障多くてあるらしといへる

或本謌曰湊入尓蘆別小船障多君尓不相而年曽經来

水守多上尓種蒔比要手多擇擢之業曽吾獨宿

みづもりたがうへにたねまきひえをえらえしわざぞわれひとりぬる

神代紀、高田窪田といへる窪田は田ならく高田は畠をいふ。くぼ田は水なつく
して畠ならのしねば、あげ田より畠地の稗勢しるそては文稗多くて、その
稗を擇捨らるるがごとく、多くの中より多は見すて捨られて、稗獨ねとる
と身を恨たるなり。業は吾等二字の誤なるべく、獨の上の吾は夜の誤なるべし。
えらえすてられてよるひとりぬるとよめるなり。巻十一人麻呂集の哥与

打田稗數多雖有擇爲我夜一人宿とありて、この哥のすゑは同じ歌と、この哥の終
せりそのくすは彼をおもくこの注を志かて

靈合者相宿物乎小山田之鹿猪田禁如母之守爲裳

たまあはばあひねんものををやまだのしゝだもるごとははしもらすも

巻十四つくはねのをてもこのもにもりへすゑははもれどもたまぞあひに
けるとよみたるのあひたは何よりよるすれしあるまのと小山田あらし鹿猪
をもるごとは母のまもりていへるもことは守るを見るべし、巻十六荒城田
の鹿田の稲をたね

一云母之守之師　此母之の之は、のしよをふれバかなひて

春日野尓照有暮日之外耳君乎相見而今曽悔寸

かすがのにてれるゆふひのよそのみにきみをあひみていまぞくやしき

夕日は遠みてれバ、よそにいはん序にて夕日のめでをいはれたるなり

足日木乃従山出流月待登人雨波言而妹待吾乎

あしびきのやまよりいづるつきまつとひとにはいひていもまつわれを

𬼀十三ヲ百ころ山田の道をとよみませるちよの條の五句とるかくるに、そうあれハ妹待を君待とせり、さハ妹まつとあれバ女のうたより偶みえざる

歌もかくれバさもくるべし、ま乎の乎ハ助辞のと

夕月夜五更闇之不明見之人故戀渡鴨

ゆふづくよあかときやみのおほゝしくみしひとゆゑにこひわたるかも

此一二の句ハ暁ともぢ[illegible]くまゝ見ぬ[illegible]うらしこふるよし

久堅之天水虚雨照日之将失日社吾戀止目

ひさかたのあまつみそらにてれるひのうせなんひこそわがこひやまめ

水ハ借字のミ、照の下日右本月とあるでてるつきのとよむべし

十五日出之月乃高高雨君乎座而何物乎加将念

もちのひにいでにしつきのたかだかにきみをいませてなにをかおもはん

望月のあの字の[illegible]まや[illegible]くさし[illegible]となりと[illegible]ハ

乎ハよまいて、手ヲ其まてしおもとお乎ておもしまさせてよろこぶ

などいへり

月夜好門雨出立足占為而往時禁八妹二不相有

つくよゝみかどにいでたちあしうらしてゆくときさへやいもにあはざらん

𬼀四月基ハつま出らなけらいあしうらとぞいしゆのうくとなりてそう、足

歩の數をかぞへ歩の奇偶をもて会不会を知るまて人のうてるまてる

らしの、神代紀火折尊帰来ヲ初潮漬足時則為足占至膝時則挙足至股

則走廻らしうちハ名の田しくてそさまま足く

野干玉夜渡月之清者吉見而申尾君之光儀乎

ぬばたまのよわたるつきのさやけくばよくみてましをきみのすがたを

くもれる夜に来て男の家をよくも見えざるらしく

足引之山呼木高三暮月乎何時君乎待之苦沙

あしびきのやまをこだかみゆふづきをいつかときみをまつがくるしさ

木の茂き山を出る月をいつの頃かと待が如く君を待わびてくるしきを思ひてあなるに

いひかけたり

橡之衣解洗又打山古人爾者猶不如家利

つるばみのきぬときあらひまつちやまもとつひとにはなほしかずけり

上ハなれ垢づける衣を解洗ひて又擣といふをそへてまつち山に続けたるは

て、まつといはんとてきてまつち山かくる言の葉ハまつち山ハかゝつ

こゝろ新く来て十八年にハふつる鈍でつるばみのなれしきぬに故のあ

やすくよみえぬかしかる人ハ返すましくして人ハたゞ人よ

まろうてぞある人

佐保河之河浪不立静雲君二副而明日兼欲得

さほがはのかはなみたたずしづけくもきみにたぐひてあすさへもがも

上ハ静けくといはん序のみ。今ハ手もなくあるを、あすさへもかくあれかしと、

君が事をいへる也

吾妹兒爾衣借香之宜寸河因毛有額妹之目乎将見

わぎもこにころもかすがのよしきがはよしもあらぬかいものめをみむ

吾妹に衣借てといひかけて次の振川を導かん料

上ハ序にて、妹が目を見んよしもあれかしと願ふ也。さて此川ハ添上

日山水屋峯より出て野田を経て流るゝ也とぞ

登能雲入雨零河之左射禮浪間無毛君者所念鴨

とのぐもりあめふるかはのさゞれなみまなくもきみはおもほゆるかも

とのぐもりハ棚曇也、帖たなぐもりとよみて、上の振川に雨ふるといひ

うへつかたハ宮ちかくして庵よりも遠くすむさまで床の浪越あぜち
なるふきも向ひおきてわが思ひをよくすれバこそも川波に寄そへて
いよしたまのなかる波の声をのみきゝて、かくちかく思ひたとへとせるなるべし
吾妹兒哉安乎忘爲莫石上袖振河之將絶跡念倍也
わぎもこやあをわするないそのかみそでふるかはのたえんとおもへや
初句のやハよぶ辞なり、わするなハわするなといへる也。集中布留山をなど
めでたき神なれバしかいへるにて、たゞ振川と続けたるのみ、あやしからぬ言葉なるのミ
まへそのかの水の絶ざるをもて誓へるなり
神山之山下響逝水之水尾不絶者後毛吾妻
かみやまのやましたとよみゆくみづのみをしたえずばのちもわがつま
飛鳥の雷丘をいふ、みをハ水の深きところをいふ、その絶ぬをたとへて
始めより末まで此歌に同じ意なるべし

如神所聞瀧之白浪之面知君之不所見比日
かみのごときこゆるたぎのしらなみのおもしるきみがみえぬこのごろ
雷神のごとく、鳴神紀にも、きこえし如くなどあるを、加三我語など見え上より
ハ面白しといひ、又ある白浪とへ知るきみハ、なれバ面知君
よりよみて、見るに人の又あまりおもしろくこそ面をあらはし知らく
見えくハせんかとあるハ、もちるといふべし、女の君と見しを見ハいかにもまた宮居殿
面知ハたゞ面を知といふこと、その心あるハ、つるハいちじろきことゞもく、他の
人ならハ、まくのみぞて、いちじるく見ゆる君といふまえ、都に瀧の白浪、或ハ比まで
こ路の萬葉にも使はしるといふ、皆いちじろき意を序とせるといへり
此從来つのるべし
山河之瀧爾益流戀爲登曾人知爾来無間念者
やまがはのたぎにまされるこひすとぞひとしりにけるまなくおもへバ

たぎハたぎるなれバ谷の内の白き浪か早き瀬のほとりよりおこるよしといへり
又ハ離れて谷の上をいへるか
足檜木之山河水之音不出人之子姤戀渡青頭鶏
あしひきのやまがはのみづのおとにいでずひとのこゆゑにこひわたるかも
上ハ子のさう田のほとりハおもくいふをさいひおくことし。姤ハ故の誤なるべし
どかるべき姤の字を用ひたり集中に数あれバ猶考べし。青以
鶏ハ鴨なれバ借るなり
高湍爾有能登瀬乃河之後将合妹者吾者今爾不有十方
こせなるのとせのかはののちもあはんいもはわれはいまならずとも
高ハ許を借てこのあたりせなり。知る此言。巻三まで浪の瀬とせぢなる
能登瀬川とはいへ巨勢路に流の瀬越といひの名なるべし。しかせて
をこち許世山といへる類之。かれハ大和高市郡巨勢に在。能登瀬川之

能登瀬と能知く意を将し亘りせて序とせり。巻十一鴨川の後瀬静
にも後もあはんと来なぎさの歌
浣衣取替河之河余杼能不通年心思無都母
あらひぎぬとりかひがはのかはよどのよどまんこころおもひかねつも
衣をとる不ハ衣の語之。一本に依て改。又一本浣を洗に作れど更なり。衣ハ上を洗て
是ハ上より八衣替をいひのべしまでは替とハあれど
とりかひ川ハ和名抄大和添下郡鳥貝(止利加比)とある其の川にて、別名(トミノ)小川ハ又
やまと志にもいへる言国の渋河ハ河内といづれ其の上ハよどまんと云序之
斑鳩之因可乃池之宜毛君乎不言者念衣吾為流
いかるがのよるかのいけのよろしくもきみをいはねばおもひぞわがする
いかるがのよるかの池ハ大和平群郡なるべし。いかるがハ推古紀興宮室於斑鳩
とあり。法隆寺の古名斑鳩寺といへば此所なるべし。因可池ハ今法隆寺村に

まを海の沖ふかく武人にて、よるよるの月をよそへしといへり。歌ハせさく序にせる、
人ハられゆる君をよくいふ也いかぬに、我ハうらふりと君を思ふといへるハ、ね
ぎしい相手のそこちる古言の係る或人云、宜毛ハ因らしく、君を我を
因らしくいかぬものをといへるも然るべし
絶沼之下従者将戀市白久人之可知歎為米也母
こもりぬのしたゆはこひむいちしろくひとのしるべくなげきせめやも
絶ハ隠の誤なるべし、又ハこもりぬハ地に隠れてよハ水の淀ひたるをいひて、
絶の字をかけるか、古事記にこもりづの下よばへてゆくハ是らをいへるなるか、
下従ハ下樋より水の走るに譬へて人に知れずといへるなり
去方無三隠有小沼乃下思爾吾曽物念頃者之間
ゆくへなみこもれるをぬのしたもひにわれぞものおもふこのごろのま
大てにいへる下樋の水の出ぐ處なく流るる沼ハ、一二の句ハ下思ひといはん序のミ、

間の下平の字を脱せしか、間をほどしも例へあれど、いささか心得ぬ辭なり
隠沼乃下従戀餘白浪之灼然出人之可知
こもりぬのしたゆこひあまりしらなみのいちしろくいでぬひとのしるべく
地に隠れたる水の隠れて、地を越出るごとく、思ひにあまりて色に出でなバ、
人に知られんといふを強く書けるなり
妹目乎見巻欲江之小浪敷而戀乍有跡告乞
いもがめをみまくほりえのさざらなみしきてこひつつありとつげこそ
難波堀江にて、妹が目を見まく欲すといひかけたり。小浪ハ重りてといはん
料也、告こそハ妹に告よかしと願ふ
石走垂水之水能早敷八師君爾戀良久吾情柄
いはばしるたるみのみづのはしきやしきみにこふらくわがこころから
石走枕詞、たるみハ瀧をいへど、此の歌でハ攝津国なる垂水也、

こなのたるといひゆくもてなこそやしハ見るべき

君者不来吾者故無立浪之數和備思如此而不来跡也

きみハこずわれハゆゑなみたつなみのしくしくわびしかくてこじとや

女の行べき事ハ都よりなしかくてもじく其下にあり、教ハしバしバ

しきりなどいふに重波とかくも波にはしきりなどいへるを、集中ニ例多きなり

よみさくかく例て

淡海之海邊多波人知奥浪君乎置者知人毛無

あふみのうみへたハひとしるおきつなみきみをおきてハしるひともなし

神代紀瀆をへたと訓り、へたハ辺と同じ意也、此歌の上の句ハ下の句をいはむ料

知くもいへるなり、辺の事ハ人皆知れども沖の浪ハ遠

ければ知人もなしといへるハ只辺のつけのことのみにてさてそのことハ下句に

あり、君を隠ておくを知人なしといへり、かく見えたり

ねうし

大海之底乎深目而結義之妹心者疑毛無

おほうみのそこをふかめてむすびてしいものこころはうたがひもなし

初句ハ深きこといはん料也、義ハ義の誤なるべし

負能納爾依流白浪無間思乎如何妹爾難相

けふのうらによするしらなみあひだなくおもふをいかでいもにあひがたき

前のハ巻十一にも出たり、納を納也とせるハ誤也、一本に依て改

念出而為便無時者天雲之奥香裳不知戀乍曽居

おもひでてせむすべなきときハあまぐものおくかもしらずこひつゝぞをる

天雲のハおくかもしらずといはん料のミ、おくかハ奥許也、行方もしらずといふに同じ

天雲乃絶多比安心有者吾乎莫憑待者苦毛

あまぐものたゆたひやすきこゝろあらバわれをなたのめまてバくるしも

あまそゝハたゆまずといふ枕詞、たのませぞその万世を治めてゝたのめぞといふ意
を取、あせ〔?〕ゝたゆみひて来ねバ、けふ〔?〕若き之莫の其今を脱せしの

君之當見乍母将居伊駒山雲莫蒙雨者雖零

きみがあたりみつゝもをらんいこまやまくもなたなびきあめハふるとも

此山歳をくるで、東ハ大和、西ハ河内のさかひに朝〔?〕あり紫〔?〕山といふ

中中二如何知兼吾山爾焼流火氣能外見申尾

なかなかにいかでしりけんわがやまにもゆるけふりのよそにみましを

集中未詳といひく、この住〔?〕の山をいふ、また山を焼煙と見て
よそといふ枕とある、のゝ人ハ人を大かたく人に見〔?〕あらんものを
なま〔?〕のおもひ〔?〕悲しとそ、又ハ吾ハまろの〔?〕までんこの〔?〕まじとあらん
この〔?〕〔?〕の

吾妹兒爾戀為便名鴈胸乎熱旦戸開者所見霧可聞

羽ハ詞ノ誤カ

わぎもこにこひすべなかりむねをあつみあさとあくれバみゆるきりかも

ちくなすハちくなしとあるに同じ、胸あつしとも〔?〕いかでかもえてあさ戸
を〔?〕れバ旅〔?〕のゆるといふ、たゞ大氣のこもるにて、気霧烟をなすといへり

曉之朝霧隠反羽二如何戀乃色丹出爾家留

あかときのあさぎりがくりかへらバにいかでこひのいろにいでにける

曉と朝ハおなじ事なれバ、かく重ねいへり、曉暁朝とかつハ言へ羽ハ詞の
字の誤なるべし、霧の紛れに妹許（がり）ゆくとて人に知れたるといふ

思出時者為便無佐保山爾立雨霧乃應消所念

おもひいづるときハすべなみさほやまにたつあまぎりのけぬべくおもほゆ

霧の深きハ小雨のごとくなれバ雨霧といへし、さて思ひ消ゆるといふの
〔?〕消るといはんための〔?〕

殺目山往反道之朝霞髣髴谷八妹爾不相牟

きりめやまゆきのふみちのあさがすみみなのわざなや、いかにあはざらん

紀伊の熊野なる…王子といふ社有、或説に紀伊といふ、しかれば熊野ある
まふで山なりん此山の麓の妹許行て逢はずていふゆゑてよめる
なるべし、我あはむは付見るなしきをこそやがてほのぼのといへん料と
せりか、さてやまぬ山なよくきこゆることいふは横致とせり

如此将恋物等知者夕置而旦者消流露有申尾
かくこひんものとしりせばよひにおきてあしたはけぬるつゆならましを

暮置而旦者消流白露之可消恋毛吾者為鴨
よひにおきてあしたはけぬるしらつゆのけぬべきこひもわれはするかも
暮にはおけれども朝のほどにはきえぬべきものとおもふをいふ

後遂爾妹将相跡旦露之命者生有恋者雖繁
のちつひにもいもにあはんとあさつゆのいのちはいけりこひはしけくと
我身のあさこいのちは生てあり恋はしげれどもとも

朝旦草上白置露乃消者共跡云師君者毛
あさなさなくさのへしろくおくつゆのけなばともにといひしきみはも
かく契りしも死て後ほどもなくまかりていまさぬをなげくなり

010190519240